

# 関口存男に見られる不定冠詞の本質 (IV)

Das Wesen des unbestimmten Artikels

bei Tsugio Sekiguchi (IV)

上 田 弘

Hiroshi Ueda

## 前書

本稿は金沢大学教養部論集人文科学篇33-2 (1996) に掲載の「関口存男に見られる不定冠詞の本質 (Ⅲ)」の継続である。

## 11. 一つの結論

Sie ist schön.(彼女は美しい)という文章について、schönは外見様相ないし特質特性を表す所謂“どんな”的タイプの形容詞であり、従って“叙述そのもの”であることに何人も異存はないと思う。schönのことを“述語”(Prädikat)とか“述補語”とかあるいは“述語内容詞”(Prädikativum)と呼ぶのをみても判る通りである。

“補語”というからには“述語”が不完全であるために必要な“補完語”ということであろう。また“内容詞”というからには“述語”が形(式)だけで、中身が空っぽであるために必要とされる“実質内容詞”ということであろう。

それなら〈不完全な〉“述語”、〈形(式)だけ〉の“述語”とは何を指すのか、それは“定動詞”という〈形(式)〉であり、ここではistを指していることはいうまでもない。そして“定動詞”という〈形(式)だけ〉では“述語”として〈不完全〉である、と言っているのである。

“定動詞”という〈形(式)だけ〉では“述語”として〈不完全〉であるのなら、〈完全な〉“述語”にするためには当然のことながら“内実”を“補完”

しなければならない。それが“実質内容詞”もしくは“補完語”、只今の場合で云えば schön である。

たとえば Sie lächlt. (彼女は微笑んでいる)という文章の場合ならば、lächelt が“定動詞”という〈形(式)〉と同時に、(微笑んでいる)という“内実”をも兼ね備えている。すなわち lächelt 一語だけで〈完全な〉“述語”になっている。それに比べて Sie ist schön. は“述語”が〈形(式)〉ist と“内実” schön の二語に分かれている。lächelt のように一語だけではなく、“述語”が ist と schön のように二語から成り立っている。二語に依り成り立つにも係わらずところが、ist は文字通り(“定形”という)ほんの〈形(式)〉だけに過ぎない。そして意味の比重が圧倒的に“内実” schön の上に掛かっているために、ist をうっかりないがしろにして、schön だけで“述語”(Prädikat)と呼んでしまうくらいである。もっとも Ich finde sie schön. (私は彼女を美しいと思う)のように、ist の不要の例がいくらかでも有ることを思えば〈うっかりないがしろにした〉とすらかならずしも云えないかもしれない。事程左様に“内実” schön の方が圧倒的比重を占め、〈形(式)〉ist が占める比重は極めて少ない。しかしいくら占める比重が少なかりとも、〈形(式)〉が整わなければ〈(100%)完全な〉“述語”と言ってはならないものだとするれば、ないしは又、〈形(式)〉が整わないがゆえにフォーマルな(正式な、公式な)“述語”と言うことは許されないにしても、それにしても schön を指して“叙述そのもの”という言い方ぐらいは十分に許されるであろう。詰まり lächelt も schön も共に“叙述そのもの”である。ただ lächelt は“人称変化する”‘叙述そのもの’であり、schön は“人称変化しない”‘叙述そのもの’である、というだけが両者の間の違いである。“叙述そのもの”であっても“人称変化”(Konjugation)しなければフォーマルな“述語”(Prädikat, Satzaussage)すなわち公式な“文”とは言えない。その為に schön に対しては〈形(式)〉ist を“補完”するわけである。

Sie ist der Täter. (彼女がその犯人だ)の der Täter、Sie ist Lehrerin. (彼女は先生だ)の Lehrerin もやはり“述補語”とか“述語内容詞”(Prädikativum)とか、あるいはまた〈形(式)〉ist を“補完”したうえで“述語”(Prädikat,

Satzaussage)と呼んでいる。しかし Sie ist der Täter.というのは Sie hat die Tat begangen.を言い換えたものであり、Sie ist Lehrerin.は Sie lehrt beruflich.を言い換えたものである。それに引き返え Sie ist schön.は〈言い換えたもの〉ではない。Sie hat die Tat begangen.や Sie lehrt beruflich.と同様の、いわば〈元の文〉である。〈元の文〉と〈それを言い換えたもの〉とを同列に置いて、schönも der Täterや Lehrerinも一緒くたに《“述補語”とか“述語内容詞”(Prädikativum)とか、あるいはまた〈形(式)〉istを“補完”したうえで“述語”(Prädikat, Satzaussage)と呼ぶ》のは味噌くそ混同である。(が、それではどちらをどう呼び変えて両者の区別をすべきかについては、改めて後日の考慮に委ねたい。) schönと〈一緒くた〉にしなければならぬのはむしろ、hatや begangenや lehrtあるいは lächeltなど“動詞”の方であって、der Täterや Lehrerinなど“名詞”の方ではない。der Täterや Lehrerinは“体言”であるのに対して schönの方は、hatや begangenや lehrtあるいは lächeltなどと同じ様に基本的に“用言”だからである。基本的に“用言”であるにもかかわらず schönが hatや begangenや lehrtあるいは lächeltと異なるのは、“人称変化しない”ということだけである。schönはいってみれば“人称変化しない用言”である。それにもかかわらず“人称変化しない”という外形的な相似点の方に眼を奪われる余り、“用言”である schönと、“体言”であるところの der Täterや Lehrerinとを同列におくわけにはいかない。

もう一度繰り返せば、名詞 der Täterは“叙述”の〈hat die Tat begangen〉を“受け”ているに過ぎない。名詞 Lehrerinもまた同様に“叙述”〈lehrt beruflich〉を“受け”ているに過ぎない。しかし schönは“叙述”を“受けている”のではなく、みずからが“叙述”である。“叙述”といえば“動詞”、“動詞”といえはいずれも必ず人称変化を持っているが、schönの様に外見様相ないし特質特性を表す所謂“どんな”的形容詞は、“人称変化を持っていない”にも係わらず“動詞”と同様に“叙述”であり、lächelt, hat, begangen, lehrt等々がそうであると同様に“叙述そのもの”である。さて再び Sie ist schön.へ戻り、〈schön〉が〈“動詞”と同様に“叙述”である〉と言う時、

その際に〈“叙述”〉は〈schön〉だけで停まるであろうか。〈schön〉の延長線上には更に何等かの事柄が考えられないであろうか。筆者は、当然考え得る！と思う。では一体何が〈schön〉の延長線に考えられるか、端的に言えば、それは名詞であると思う。(彼女は美しい)に違いないが、例えば(美しい娘)Mädchenであるとか、(美しい女性)Frau だとか、(美しい心の人)Seeleだとか、あるいは(美しい先生)Lehrerin であるとか、その他等々、〈schön〉のあとには必ず何等かの表象、輪郭、イメージ、映像、形姿といったようなものが想定される筈である。たとえ明記されないとしてもこれらのものは‘含み’として潜在する筈である。詰まり〈“叙述”〉は〈schön〉だけに停まるのではなく、そのあとに想定されるところの名詞にまで及ぶのである。そのあとに想定される名詞もまた従い〈“叙述”〉なのである。schön の様な所謂“どんな”的形容詞だけが外見様相ないし特質特性を表すのではなく、〈“どんな”的形容詞〉のあとに想定される“名詞”もまた schön と同じ様に〈外見様相ないし特質特性〉を表すのである。Mädchen, Frau, Seele, Lehrerin に限らず、一部の例外を除けば基本的にすべての名詞は当然のことながら、それぞれが互いに異なった表象を有し、それぞれが互いに異なった特徴特性を持っている筈である。Mädchen には Frau や Seele や Lehrerin とは別の、Mädchen ならではの外見様相がある筈だろうし、また Lehrerin は、Mädchen や Frau や Seele にはない特徴特性を持っているであろう。世に沢山の名詞を数えるということは、とりあえずこれらの名詞いずれを取ってみても、自身を他から区別しうるような〈外見様相ないし特質特性〉をそれぞれが有しているということではなかろうか。たとえば、Ein Mädchen wirbt nicht. (娘なら自分の方から言い寄りはありません)<sup>(1)</sup> ならば、Mädchen が持っている特有の性質及びイメージ(表象)に“狙い”(焦点)が絞られているであろう。

さてこうして Sie ist schön. における〈schön〉は、“動詞”と同じ様に“叙述”であるには違いないが、ただその際、“叙述”〈schön〉のあとには何等かの名詞が‘含み’として常に伏在する。この〈伏在する〉名詞を‘顕在化’した場合にはどうなるか。その時に冠置されるのが不定冠詞 ein である。

不定冠詞 ein (を冠置された名詞)は従って元々“叙述”〈schön〉の延長

線上に伏在しているものが‘顕在化’するに過ぎない。〈伏在する〉名詞をたとえば Mädchen とするなら、‘顕在化’すれば Sie ist ein schönes Mädchen. という文章になるが、その際 ein Mädchen に schönes がくっついたのではない。schönes の延長線上に ein Mädchen が生まれたのである。

“叙述” schönes の延長線上に生まれたのである以上不定冠詞 ein (を冠置された名詞 Mädchen) はあくまで“叙述”である！ということ、これが不定冠詞の定義の第一点である。別の言い方をするなら、定冠詞 (を冠置された名詞、例えば Sie ist der Täter の der Täter) は“叙述”ではない！ということである。また無冠詞 (を冠置？された名詞、例えば Sie ist Lehrerin の Lehrerin) もまた同じく“叙述”ではない！ということである。定冠詞〈der Täter〉も無冠詞〈Lehrerin〉も“叙述”ではない！というなら、ではこの二つは何と呼ぶのか。“沈黙”と呼ぶしかないと思う。あるいは“叙述”をほぼイコール“述語”と考えるならば、それに対応して“主語”と呼んでも差し支えないと思う。何故なら“沈黙”が“主語”の本質であるので。

なおここで呉々も誤解のないように確認しておかねばならない。例えば次のような三つの文章を並べてみる時、

Ich habe ein schönes Mädchen gesehen. (私は美しい娘を見かけた)

Da kommt ein schönes Mädchen. (あそこに美しい娘がやってくる)

Sie ist ein schönes Mädchen. (彼女は美しい娘である)

ein schönes Mädchen はそれぞれの文の中において目的語(4格)、主語(1格)、あるいは述補語(1格)の役目を果している。ところが一方不定冠詞の定義の第一点：ein(を冠置された名詞) はあくまで“叙述”である！というのは勿論、目的語(4格)、主語(1格)にも当てはまることであって、述補語(1格)の場合のみに限った事ではない。すなわち Da kommt ein schönes Mädchen. の ein schönes Mädchen は文中の主語の役目を担っている。にも係わらず“叙述” schönes の延長線上に生まれた ein(を冠置された名詞 Mädchen)である以上あくまで“叙述”である。Ich habe ein schönes Mädchen gesehen. の

ein schönes Mädchen もまた目的語の役目を担っているが、ein(を冠置された名詞 Mädchen)である以上“叙述”であることはいうまでもない。

つまり ein schönes Mädchen は文中の役目に関わりなく、主語(1格)であれ、述補語(1格)あれ、あるいはまた目的語(2、3、4格)であれ、“叙述”schönes の延長線上に顕在化したところの ein が冠置されているからには、Mädchen もまた徹頭徹尾“叙述”となる。逆に定冠詞および無冠詞を冠置された名詞は、こちらも文中の役目に関わりなく、“沈黙”(≡主語)となる。例えば Sie hat die Tat begangen. ならびに Sie ist Lehrerin. では、die Tat は目的語(4格)であり、lehrerin は述補語(1格)である。目的語(4格)であれ、述補語(1格)であれ、文中の役目に関わりなく die Tat も lehrerin も“叙述”の反対、即ち“沈黙”(≡主語)である。“沈黙”(≡主語)とは何か、die Tat と Lehrerin が何故“沈黙”(≡主語)なのか、については後で触れる。

“叙述”schönes の延長線上に生まれたのである以上不定冠詞 ein(を冠置された名詞たとえば Mädchen)はあくまで“叙述”である！ということ、これが不定冠詞の定義の第一点であった。一方 schön の如き所謂“どんな”的形容詞の延長線上に生まれたのであるから不定冠詞を冠置された名詞(たとえば Mädchen)も“どんな”的性質を獲得する。これが不定冠詞の定義の第二点である。ein を冠置された名詞たとえば ein Mädchen は、Mädchen という名詞がもっているイメージ、印象、外見様相ないし特質特性を表現する。というのは Mädchen という名詞には、たとえば Frau や Seele や Lehrerin といったものとは別の、Mädchen ならではの独自の外見様相というものがある筈だろうし、Frau や Seele や Lehrerin といった名詞にはないような特徴特性がある筈だからである。

不定冠詞 ein(を冠置された名詞)とは何か。その結論は取り敢えず次のように定義できる。

第一点：(人称変化を持たない)叙述である。

第二点：叙述(の中身)は(動作や状態ではなく)輪郭印象ないし特質特性である。

この結論に至る前提は次の通り。外見様相あるいは輪郭印象ないし特質特性

を表す、所謂“どんな”的タイプの形容詞(例えば schön とか klein とか jung とか naiv 等々)の延長線の上に不定冠詞 ein(が冠置された名詞)は生まれる。そして所謂“どんな”的タイプの形容詞は(人称変化は持たぬが)“叙述”である。

“どんな”的タイプの形容詞の延長線上に生まれたから不定冠詞 ein(を冠置された名詞)は、“叙述”で且つ外見様相特質特性を表すのであるが、それにもかかわらず双方の間に大きな隔たりが生ずる。それは主語をめぐる問題である。

Sie ist schön. においても Ich finde sie schön. においても、schön の主語(に相当)は云うまでもなく sie である。schön のように所謂“どんな”的タイプの形容詞は“叙述”なのだから、当然何処かに主語(に相当するもの)がなくてはならぬ筈だからである。そうであるなら例えば Ich habe ein schönes Mädchen gesehen. においては、ein schönes Mädchen の主語(に相当するもの)が何処にあるのか。ein Mädchen は“叙述”schönes の延長線の上に生まれたのだからやはり“叙述”でなければならない、というのが上に述べた定義である。“親”と言えは“子”の在ることを含蓄するように、“叙述”と言えは“主語(に相当)”の在ることを含意する。ein Mädchen が“叙述”であるなら当然何処かに主語(に相当するもの)がなくてはならない。例えば“叙述”gesehen(分詞)に“形式”habe(定形)が備わることによって、述語(完璧な“叙述”)gesehen habe が形成されているが、これに対応する主語は勿論 Ich である。Ich finde sie schön. における“叙述”schön に対応する主語(相当)も勿論在る。sie である。ただ“叙述”ein(schönes)Mädchen に対応する主語(相当)だけは何処にも見当たらない。しかし上述の不定冠詞の定義に従う限りは、主語(相当)は必ず存在する。〈存在〉はするが〈見当たらない〉とすれば、ein(schönes)Mädchen の内部に隠れている、ということになる。ein(schönes)Mädchen は“叙述”であるが為に主語(に相当するもの)を内含することになる。主語(相当)を“内含”するのだから ein(schönes)Mädchen は結局、“叙述”であると同時に“主語”(に相当するもの)でもあると言えるじゃないか、ということに成りかねないが、決してそうではない。“親”と言えは“子”の在る

ことを内含するが、“親”はやはりあくまで“親”であって断じて“子”にはならないのである。

等しく“叙述”でありながら、*Sie ist schön.* の schön も *Ich finde sie schön.* の schön も、そしてまた *Ich habe ein schönes Mädchen gesehen.* の *gesehen habe* も“主語”(に相当するもの)をみずからの外部に持っているのに、*ein(schönes)Mädchen* だけはそれを“内含”している。これは不定冠詞の定義の第三点目を成す。このことが、動詞(*gesehen* や *habe*)及び“どんな”的タイプの形容詞(*schön*)と、不定冠詞を冠置された名詞(*ein* 《*schönes*》 *Mädchen*)との間に生ずるところの決定的な隔たりである。この隔たりはインパクトがあまりにも強い為に吾人は錯覚して、*ein(schönes)Mädchen* を思わずついうっかりして“主語”(に相当するもの)と受け取り、動詞(*gesehen* や *habe*)及び“どんな”的タイプの形容詞(*schön*)とすっかり対置させてしまいかねないくらいである。しかしこの隔たりがいかにか決定的であろうとも、その隔たりを埋めて余りあるくらい決定的なのはむしろその共通項、すなわち《共に等しく“叙述”である》という両者の間に在るこの共通面である。

さて再び不定冠詞の定義とその前提に戻ろう。またしても同一文言の再三にわたる繰り返しとなるが、外観様相あるいは輪郭印象ないし特質特性を表す、所謂“どんな”的タイプの形容詞(たとえば *schön* とか *klein* とか *jung* とか *naiv* 等々)の延長線上に生まれたのだから、不定冠詞 *ein*(が冠置された名詞)は“どんな”的性質を獲得する。たとえば、*Da kommt ein Mädchen.* の *ein Mädchen* は、不定冠詞 *ein* が冠置された名詞だから〈“どんな”的性質を獲得する〉ことはいうまでもない。只今の場合たとえ形容詞が明示されていなくとも“どんな”的性質の形容詞から不定冠詞 *ein* が生まれて来ることには変わりないからである。あるいはまた *Ich habe ein schönes Mädchen gesehen.* の *ein schönes Mädchen* も勿論、“どんな”的性質の形容詞である *schönes* の延長線の上に〈“どんな”的性質を獲得〉した *ein Mädchen* であることは言を待たない。従って *schönes* も *ein Mädchen* も共々“どんな”的性質がその本質であるから、*ein schönes Mädchen* 全体が正に“どんな”的性質そのものである。



schönes も ein Mädchen も全体がまさしく“どんな”的性質そのものであると云うなら、たとえば Ich habe das schöne Mädchen gesehen. の das schöne Mädchen はく“どんな”的性質そのもの〉ではないのであろうか。ein が das に変わっても schöne の“どんな”的性質に変わりはないように思われるし、その延長線上に姿を現す名詞 Mädchen も又従って当然のことながら“どんな”的性質を獲得するように思われる。そのように思われるというのも確かに無理もないが、それにもかかわらずこの際、それは明らかに錯覚となる。というのは das が冠置されれば、Mädchen は云うまでもなく schöne すら“どんな”的性質を失ってまうからである。なぜ失ってしまうのか。その根拠は、das を冠置された Mädchen と schöne は言わば“沈黙”(≡主語)となってしまう、“叙述”ではもはやなくなるからである。“どんな”的性質というのは正に“叙述”を【前提】とする。然るに“叙述”ではなくなるということは、“どんな”的性質をももはや失ってまうことになる為である。とりわけ schöne は外観様相ないし特性特質を表現する所謂“どんな”的タイプの典型である。それにも係わらず此处では外観様相ないし特性特質をもはや表現しない。そもそもがもはや“叙述”ではなくなつて、【前提】を失っているからである。das によって“叙述”が封ぜられてしまい、schöne はもはや“沈黙”(≡主語)に過ぎない。外観様相乃至特性特質といった所謂“どんな”的性質をもはや“叙述”出来ない。

ein schönes Mädchen は“叙述”であり、“叙述”のその中身は(動作や状態ではなく)所謂“どんな”的性質である。das schöne Mädchen はそれに対して“沈黙”であるから動作や状態は言うに及ばず、“どんな”的外観様相も“どんな”的特性特質も一切表さない。“沈黙”はどこまでも“沈黙”である。

“沈黙”はあくまで“沈黙”であるから“どんな”的外様性質も一切表さない筈であるのに、“叙述”である“どんな”的タイプの形容詞 schön や、あるいはまた同様にその延長線上に生まれる“叙述”Mädchen が何故 das のあとに続くのであろうか。“叙述”を封ずる筈の das のあとに“叙述”である schön や同じく“叙述”である Mädchen が存在するのは矛盾ではなからうか。なぜこのような矛盾が生ずるのか。その訳は“沈黙”を“表す”ことから生ず

る。“沈黙”を“表す”つまり“沈黙”を“叙述”することの矛盾である。矛盾だからといってしかしそれを避けるために、文字通り沈黙していたのでは“沈黙”に成らない。“沈黙”で在るためには“表す”つまり“叙述”せざるを得ない。したがって逆に言うならば、“叙述”だからと云って“本当に叙述”であると思っではいけない。“叙述”に見えて“実は沈黙”という事態も当然生じて来る訳である。そしてこの両者、“本当に叙述”と“実は沈黙”を見分けるための標識が不定冠詞と定冠詞(乃至無冠詞)である。

ein schönes Mädchenがdas schöne Mädchenに変わってもschöneの“どんな”的性質に変わりはないように見えるかも知れない。その延長線上に姿を現す名詞Mädchenもまた従って当然のことながら“どんな”的性質を獲得するように思えるかもしれない。しかしだからといって“本当に‘どんな’的叙述”と思っではならない。dasが冠置されているので、schöneもMädchenも“実は沈黙”である。“本当に叙述”はein schönes Mädchenの方である。本来的に外様性質を“叙述”するschönという形容詞と、その延長線上にこれまた外様性質を“叙述”するMädchenという普遍名詞を共に持ち合わせて居ながら、根を異にしている。片や“正真正銘の叙述”、片や“沈黙から生まれる叙述”、互いに相対立する根から生まれる“叙述”(?)である。

無冠詞(の名詞)の場合も基本的には定冠詞(を冠置された名詞)と同じである。定冠詞に関しては指示代名詞から派生したのであろうが、文字通り時間空間の一点を“指し示す”のがその本義である。《一点を“指し示す”》というのは「“指し示す”のは“どれ”か」ということなので、“どれ”指定と呼んでも構わないと思う。あるいは不定冠詞の本義、“どんな”的規定に対し、語呂合わせ的に“どの”的規定<sup>2)</sup>と呼ぶことも出来るかもしれない。ただし“どんな”的規定は“叙述”であるのとは逆に“どの”的規定の方は“沈黙”(≡主語)ではあるが。

さて《一点を“指し示す”》というのは「視点を其処にじっと凝らす」「其の一点を凝視する」「其処に眼を留める」ということを意味する。「凝らす」「留める」のであるから視点を其の一点に「静止」させるのである。「静止」させたその瞬間から、一方で直ちに「動き出す」ものがある。この「動き出す」

ものこそが“叙述”でありあるいは“文章”に他ならない。文章とは勿論“叙述”であるが、“叙述”とは話者の眼に映る出来事つまり話し手の眼に映る「動き」に他ならない。そして“叙述”として「動き出す」ためには視点を其の一点にしっかりと「止め」、「沈黙」を厳守しなければならない。微動だにしてはならない。すこしでも動き揺らげば“叙述”は停止し、“文章”はお流れになってしまうであろう。「止まれ」(沈黙)ば「動く」(叙述)、「動け」ば「停止する」のが視点(≡主語)と“叙述”、“沈黙”(≡主語)と出来事の関係である。話し手の眼に映る、或いは心に感ずる「動き」が“叙述”ならば、微動だに許されない話し手の視点(≡主語)は“沈黙”である。

Er findet das junge Mädchen schön. (彼は若い娘のことをきれいだと思う)を例にとるなら、Er が話者の視点(主語)である。話し手の視点が Er の上にしっかり「留まった」おかげで、詰まり“沈黙”がしっかり厳守されたおかげで、findet という「動き」(現象)が話者の眼に映し出され得たのである。もし話者の眼にしっかり「止まらなかった」ならば、つまり“沈黙”がしっかり厳守されなかったならば、話者は findet という「動き」(現象)に気付かず、“叙述”は停止し、“文章”はオジャンになってしまったであろう。

das junge Mädchen もまた話者の(もしくは Er の)視点(≡主語)である。話者の(もしくは Er の)視点が其処(das junge Mädchen)にしっかりと「静止しなかった」ならば、即ち“沈黙”がわずかでも揺らいでいたならば、schön という「(心の)動き」(感動)は出て来ない、即ち「出来事」は起こらない筈である。

視点(主語)Er に対応する叙述は findet である。視点(≡主語) das junge Mädchen に対応する叙述は schön である。それではたとえば Er hat das junge Mädchen gesehen. という文に於いて、目的語 das junge Mädchen に対応する叙述は何処に在るのであるだろうか。何処にも見当たらない。das junge Mädchen は(目的語であろうが、述補語であろうが、あるいはまた主語であろうが、文中で果たす役目に全く関係なく)定冠詞が冠置されている以上あくまで“沈黙”(≡主語)である。即ち視点(≡主語)である。“子”と言えは“親”の在ることを含蓄するように、主語に相当するもの(視点、即ち“沈黙”)が在

る、と言えはそれに対応する“叙述”が在ることを含意する。“在る”ことは“在る”が何処にも“見当たらない”とすれば、“叙述”は das junge Mädchen の内部に隠れている、ということになる。das junge Mädchen は主語相当(≒主語)である為に“叙述”を“内含”することになる。“叙述”を“内含”するのだから das junge Mädchen は結局、主語相当(≒主語)であると同時に“叙述”でもあると言えるじゃないか、ということに成りかねないが、けっしてそうではない。“子”と言えは“親”の在ることを内含するが、“子”はやはりあくまで“子”であって断じて“親”にはならないのである。

《一点を“指し示す”》つまり「“どれ”かを指定する」のが定冠詞の本義であるとするなら、「“どれ”かを名指す」のが無冠詞(の名詞)の本義である。関口存男はこのことを『掲称』と呼んでいることは周知の通りである。それは恐らく、広く世の人々の口の端に上り、それ特有の意味と背景を有して合言葉化した事柄を、言ってみれば固有の名称のようにして挙掲する、という意味であろう。つまり「固有名を挙げる」かのように取り扱うことによって「合言葉である」かのように取り扱うのが無冠詞(の名詞)である。それは丁度、固有名詞に無冠詞が多いのに似ている。固有名詞というのはそれを挙げる人およびそれを受ける人々の間で、“既知”の事柄あるいは人物として「あ、あの事か」「あ、あの人の事か」といった具合にピッタリ“符合”することを前提としている。固有名詞というのはだから極端に云えば個々のものに付けられた“符号”とか“記号”とか“番号”のようなものかもしれない、そしてそれが世に広く一致(符合)して通用すれば世の“合言葉”ということになるろう。無冠詞(の名詞)は従って、人口に膾炙し、遍く知れ渡った“符号”、つまり“合言葉”であるか、もしくはそのような意味の(ものとしての)取り扱いを受ける。

既に広く人々に知られて、その言葉を耳にすれば「あ、その事を云っているのか」「あ、あの人の事か」といった具合に、誰にも“符合”(通用)する“固有名”を“名指す”かのような扱いを受けるのが無冠詞(の名詞)であるとするれば、「“どれ”かを“名指す”」のがその本義であると言って構わないであろう。指示代名詞から派生したと思われる定冠詞が“どれ”かを“指して示す”のに対し、“どれ”かを“示す”のに“固有の名称”(“固有の合符号”、“合

言葉” )をもってするわけである。“指して示す” のも“固有名を挙げる”(名指す)のも《一点を“指し示す” 》という点には変わりがない。既述のごとく《一点を“指し示す” 》というのは視点を其の一点に「静止」(固定)させることである。別の言い方をするなら、“沈黙” を厳守(堅持)することを意味する。従い無冠詞(の名詞)は定冠詞(を冠置された名詞)と全く同様に“沈黙”(≡主語)であり、即ち視点(≡主語)である。

たとえば Er hat junges Mädchen gesehen. (彼は若い女の子をみかけた) という文において、目的語の役目を担っている junges Mädchen は無冠詞である。無冠詞であるから junges Mädchen は“沈黙”(≡主語)である。本来的に外様性質を“叙述” する junges という形容詞と、その延長線上にこれまた外様性質を“叙述” する Mädchen という名詞が続くが、これを“本当に叙述” であると思ってはいけない。“本当に叙述” は ein junges Mädchen の方である。junges Mädchen の方は無冠詞であるから“合(図の)符号” の扱いを受ける。それを使用する人々の間で“固有” の意味を有する“合図” や“符号” というのは言わば“固有名を挙げる” ようなもので、《一点を指し示す》ことであり、視点を其の一点に「静止」(固定)させることである。決して「動き」(出来事)即ち“叙述” ではない。“沈黙”(≡主語)である。“沈黙”(≡主語)にもかかわらずそれでは何故“叙述” である“どんな” 的タイプの形容詞 junges や、あるいはまた同様にその延長線上に生まれる“叙述” Mädchen を使用するのであろうか。その訳は定冠詞(を冠置された名詞)のケースと全く同様である。

“沈黙” であるからといって本当に沈黙していたのでは“沈黙” にならない。“沈黙” で在るためには“表す” つまり“叙述” せざるを得ない。「静止」を「動作」によって“表す” 矛盾である。したがって“叙述” だからと云って“本当に叙述” であると思ってはいけない。定冠詞(を冠置された名詞)の場合と同様“叙述” に見えて“実は沈黙” である。言い方を換えるなら、等しく“叙述” でありながら、定冠詞を冠した“叙述” 及び無冠詞の“叙述” と“不定冠詞を冠した“叙述” は相対立する根から生ずる。前二者は“沈黙” から生まれる“叙述” であり、後者は“根っから” の“叙述” である。

## 12. 数と不定冠詞

数詞なかんずく“壹”は不定冠詞と深く繋がっている。確かにその通りである。ただその理由としてしばしば挙げられる「壹から不定冠詞が生まれた」ということに対してかねてより疑問を抱いているのが筆者である。と言うのも筆者には逆に「不定冠詞から壹が生まれる」としか思えないためである。あるいは言葉を換えれば、「壹から不定冠詞が生まれた」というときの「壹」というのは、実はその正体は既に「不定冠詞」ではないのか、それを錯覚して「数詞」と思い込んでいるのではなかろうかというのが筆者の疑問である。

さて「数詞」というのはいうまでもなく「数える詞」ということだが、ところで「数える」というのは“貳”以上、参、四、五、…が基本であって、“壹”を「数える」などということは後になって、“貳”以上、参、四、五、…の延長線上に思い付いたものに過ぎないのではなかろうか。数の歴史は寡聞にして無案内ではあるが、筆者のこの様な推測から、“貳”以上、参、四、五、…をいちおう“壹”とは区別して考えたいと思う。

“複数”貳、参、四、五、…は無冠詞の名詞と同様、特殊であるとはいえ基本的には“合符号”（合図の記号）である。「番号」「号数」といえば差し当たり序数(Ordinalzahl)を思い起こすが、基数(Kardinalzahl)の zwei, drei, vier, …も、その一つ一つが“固有の合図”、“固有の記号”なのである。“固有の名称”とか“固有の合符号”とかあるいは“合言葉”（ではたとえないにしても）であるかのように取り扱われるのが無冠詞の名詞であったが、非常に特殊とはいえ基本的には、無冠詞の名詞と同様の取り扱いを受けるのが zwei, drei, vier, …である。

基本的には無冠詞の名詞と同様の取り扱いを受けるとすれば、zwei, drei, vier, …は「動き」(出来事)即ち“叙述”ではない。“沈黙”(≡主語)と見做される。表現を換えれば、“沈黙”から生まれる“叙述”である。従って zwei, drei, vier, …は、“根っから”の“叙述”であるところの不定冠詞 ein とは相対立する根より生ずることになる。たとえば次の二つの文の下線部を比べてみよう。

Ich habe ein Buch gekauft. — Was für eins ist das? — Ein interessantes.  
 (本を一冊買いました。—どんな本ですか。—面白い本ですよ。)

Ich habe Bücher gekauft. — Was für welche sind das? — Interessante.  
 (本を何冊か買いました。—どんな本ですか。—皆面白い本ですよ。)

ein Buch は(数詞ではなく)不定冠詞とする。Bücher は勿論複数(numerus pluralis)である。ein Buch は不定冠詞が冠置されているので、所謂“どんな”的タイプの形容詞の延長線上に生まれる“叙述”である。従って ein Buch は当然“どんな”的性質を有する“叙述”である。だから「“どんな”本ですか」という問が表に堂々と出てくる。逆に Bücher は、「“どんな”本ですか」という問が話題の表に出ているように見えるだけに過ぎない。つまり「見える」からといって「本当に表に出ている」と思ってはいけない。Bücher には「具体的な数詞」がなくとも“複数”であるから「数」である。「数」は無冠詞の名詞と同様の取り扱いを受け、「動き」(出来事)即ち“叙述”とは見做されない。“叙述”ではなくてそもそもが“沈黙”なのだから、「どんな本ですか」という問が叙述の表に堂々と憚りもなく出てくる筈がない。Ein interessantes (Buch)に比べれば Interessante(Bücher)は“日影”の“叙述”である。Ein interessantes が青天白日の下における“叙述”であるのに対立して、Interessante は“沈黙”にその根を持つため、つねに“沈黙”の“陰”を背負う“叙述”である。

再び不定冠詞に戻るなら、不定冠詞(が冠置された名詞)とは何か。その定義は、

一つ、“叙述”である、

二つ、“叙述”(の中身)は(動作や状態ではなく)輪郭印象ないし性質様相である、

三つ、“叙述”に対応する主語(相当)は“内含”する、

以上の三点に要約出来るであろうが、ここではなかんづく「輪郭印象」に注意したい。「輪郭印象」を“叙述”するというのは「形態」「姿」「象(カタチ)」

を“造形”することであり、話者の脳裡に映像として「象(カタチ)」が“固まる”ことである。即ち【表象の営為】である。液体のように流れ去ったり、気体のように霧散してしまうのではなく、「象(カタチ)」へと結晶し、“確固”とした「(固体の)姿」をとることである。不定冠詞の定義は従って一部、次のように言い換えることができる：“叙述”(の中身)は(動作や状態ではなく)固体の姿をとることである、と。

「固体の姿をとる」という出来事(“叙述”)はイコール“数える”ということにはならない。“数える”ためには「固体の姿をとる」ことは不可欠であろうが、「固体の姿をとれ」ば“数え”なければならないというものでは決してない。“個”と“個数”は異なる。“個”はしかも“叙述”(出来事)であり、“数”は“沈黙”に過ぎない。“沈黙”に過ぎない“数”、たとえば interessante Bücher(複“数”)にそれでは何故“叙述”である“どんな”的タイプの形容詞 interessant や、あるいはまた同様にその延長線上に生まれる“叙述” Buch を使用するのでしょうか。その訳は無冠詞(の名詞)のケースと全く同様である。“沈黙”であるからといって本当に沈黙していたのでは“沈黙”にならない。“沈黙”で在るためには“表す”つまり“叙述”せざるを得ないからである。

このことから明らかになるのは、“叙述”のために“沈黙”が用いられるのではなく、“沈黙”を“表す”ために“叙述”が用いられるということである。即ち、“個”(不定冠詞)のために“個数”が用いられるのではなく、“個数”を“表す”ために“個”(不定冠詞)が必要なのである。“数”は“個”を条件とするが“個”は“数”を条件としない。先ず“個”が存在して、次にようやく“数”の存在があり得るとすれば、「“数詞” 壺から不定冠詞が生まれる」などということがあり得るだろうか。逆に、「不定冠詞 ein(e)s から“数詞” eins が生まれる」としか考えられない。

“個”から“個数”へ、“叙述”から“沈黙”へ、出来事(動き)から視点(静止)へ、不定冠詞から数詞(壺)へ、この変移を図らずも我々に推察させて呉れるのは、関口存男が使用する「単回遂行相動作」という術語である。jemandem eins versetzen(ある人をドカンと一丁やっつける)の eins、



Kommen Sie (ein) mal vorbei! (まあ一寸お立ち寄り下さい)の (ein) mal、jemandem einen Stich versetzen (チクリと刺す)の einen のように、動作の遂行にドカンと“勢い”をつけたり、サッとやってのける“スピード”を与えたり、あるいはチクリと“鋭さ”を加える件の ein- の機能のことを指している。動作というのは物と違ってとにかく形や輪郭を持ちにくい。やゝもすれば際限なく広がったり、散漫に流れたりして印象が薄くなりがちである。このような動作に時間的けじめを付け、集中圧縮して瞬間的纏まりと締めを与え、もって動作の輪郭を強く印象付けようという ein- である。相撲でも中身の“凝縮”した熱戦ほど観客はその“瞬間”に酔い、大“一番”(ein-)の“印象”(輪郭)が鮮やかにくっきりと浮かび上がるであろうし、またラグビーのスクラムも時間的にも空間的にも緩んでは相手をグイッと押す(einen Druck ausüben)ことは出来ない。一瞬に“集中”すればする程、パックが“固けれ”ば“固い”程瞬発力が加わり、スピードと威力が格段に増して、突っ込みに鋭さが出てくるであろう。

動作の遂行を一瞬の内に集中圧縮して“固形”化し、もってその印象(輪郭)を浮き彫りにする ein- はまさに「固体の姿をとる」意である。そしてしかも“数える”(数詞)という意は全くない。この点に関する限り不定冠詞 ein- と完全に一致する。ただ不定冠詞 ein- は「固体の姿をとる」という“叙述”(出来事)であるのに対して単回遂行相 ein- は、zwei, drei, vier, …と同じく“沈黙”である。出来事(動き)ではなくて明らかに視点(静止)である。此の点に関しては「数詞」zwei, drei, vier, …の側と一致する。

生まれ出る根が等しく“沈黙”に在りながらそれでさえも、「数詞」zwei, drei, vier, …が“個数”であるのに対し、単回遂行相 ein- は“数”とは全く縁が無く単に“個”(固体)に留まるだけである。増してや(その根が)“沈黙”ですらない不定冠詞 ein- においては、“数”との間に一層の隔たりがあることは想像に難くない。「隔たり」どころか、その根に於いて不定冠詞 ein- は「数詞」[zwei, drei, vier, … 従って勿論数詞 eins も]と相対立して永遠に交わることすらしない。単回遂行相 ein- の存在は、不定冠詞 ein- と数詞 eins の間に横たわるこの永遠に交わることのない対立を、吾人が理解する一助かもしれない。

### 13. 終わりに

本稿の目的は関口存男の主著『冠詞』を手掛かりに、不定冠詞の本質を理論面で捉えることであった。理論面で捉える、ということは「言葉で定義する」ということであろうから、一言で言い表すなら次のように定義できると思う：

定冠詞(を冠置した名詞)と無冠詞(の名詞)はその根を“沈黙”(≡主語)に持つのに対立して、不定冠詞(を冠した名詞)の本質は、その根を“叙述”(≡述語)の中に持つ。前二者と後者は根本的に(文字通り根元において)対立する。

(なお『無冠詞(の名詞)』というとき、無冠詞の複数名詞と無冠詞の単数詞 eins の名詞、単回遂行相 ein-、そして無冠詞の物質名詞をも含むのは当然である)

そして筆者をしてこの認識に至らしめたきっかけは、関口存男著『冠詞』中の一言：“不定冠詞を冠した名詞は、達意眼目から云って、何等かの意味において述語である”<sup>(3)</sup> という文言であったように思われる。 [完]

#### 註

- (1) 関口存男 「冠詞 第二卷 不定冠詞篇」第2版 昭和47年 三修社 508ページ
- (2) 関口存男 「冠詞 第一卷 定冠詞篇」第5版 1978年 三修社 21ページ
- (3) 関口存男 「冠詞 第二卷 不定冠詞篇」(前出と同じ) 236ページ